とある憂鬱な一日のこと

隣のマニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある憂鬱な一日のこと

【Ｎコード】
Ｎ７２３６Ｅ

【作者名】
隣のマニア

【あらすじ】
執事同士の交流会に参加する・・・・千桜に与えられた使命はたったこれだけだった。しかし、自体は千桜にとって最悪の展開だった。綾崎ハヤテと一日仲良くする・・・・それを命じられてしまったのだ。自分の正体がばれたらどおしよう・・もう学校になんて行けない・・・これはそんな千桜の憂鬱な一日を描いた小説である。

悩むとしわが増えると誰が決め付けたんだ

「あ〜、これからどうすればいいんだか」

商店街を歩く一人の女子がいた。彼女は名門白皇の生徒会の書記をやったりしている優秀な生徒である。

が、しかし、メイドでもある。

今彼女が悩んでいるのはそれだった。

ただ、今までもそれ関係で悩んでいたが、今度は程度が全然違う。

「これって、私に死ねっていってるんじゃないか」

人がこれでもかというほどいる商店街で、この極限まで落ち込んだ千桜は明らかに浮いていた。どこにいとうと絶対に見つけられるほどに。

周りの人も、ある人は気持ち悪そうに、ある人はかわいそうな目で彼女を見た。

そもそも、彼女がこうなった原因はさっきまでいた彼女の仕事場、愛沢咲夜邸にある。

「ほなお疲れ様やな」

いつも通り、学校帰りにバイトした千桜だったが、ここまではいたっていつもどおりだった。

部屋の掃除や、片付け、お茶などの準備とか俗に言う雑用をやって今日も仕事は終わった。しかし、問題はその後だった。

咲夜と一緒に話をしながら着替えをしている最中だった。

「あのな、ひとつ頼みごとがあるんやけど・・・」

これ自体はよくあることだった。今度来るときにアイス買ってきて欲しいとか、いい服はないかとか、ギャグのネタを提供してくれとか、そんな些細なことばかりだった。

だから、

「いいですよ」

と軽く返してしまったのだ。これが一番の失敗だった。今までの人生の中でワーストスリーに入るくらいのだ。

咲夜の頼みごととは、こんど行われることになった使用人同士の交流会に出て欲しいというものだった。

各家の主人が先にくじをひき、ペアをつくりそのペアで仲良くすごそうというものらしい。

で、咲夜はナギとペアだったらしい。ということは・・・

「綾崎さんと仲良くしてこいと・・・・」

・・・・・・

こんな感じだ。

知っての通り、千桜の学校でのイメージは”まじめ””固い人”とか、そんな感じのがり勉ちゃんなのだ。もちろんハヤテもそう感じているはずだ。

な・の・に、そんな彼女が愛沢家でメイドをやっていると知られたら？もしそれを周りの人に知られたら？

恥ずかしくて死んでしまうに決まっている。

それで、いま彼女は悩んでいるわけだが、いくら考えても解決策は思いつかない。きっとないだろう。だって交流会には出なきゃいけなんだから。

「ばれないようにきつめのコスプレしてくか・・・」

そんなことも考えてみたが、ばれたときのことを考えると恐ろしい。

「どうすれば・・・・どうすればいいんＤＡ！！！！！」

無駄だとは頭の中では分かっている。でも、反射的に出る反応は止められなかった。

そんな感じで必死に現実に対抗しているうちに、翌日はやってきて

しまった。

急展開になったときのその人の対応でその人の読んでる漫画が分かる

「あ゛〜、これからどうすればいいんだか」

※前回とおなじ冒頭で始まったのは前回の話の時と千桜さんをとりまく状況はまったく変わっていないからです。消して手抜きではありません。

そんなわけで、結局翌日の朝。

家に帰った後も勘が見たはいいがまったく良い案は浮かばず、結局寝てしまい、今に至っている。

とりあえず、朝ごはんを食べにリビングに行くと家族から昨日の夜中は

「あ゛〜」

とか

「何でなんだ～」

とか唸っていて五月蝿かったと家族から言われたが、本当にそうなるくらいの真剣な問題なので許してもらいたい。

何も準備も出来ずに待ち合わせの時間まであと一時間しかないのだ。だが、そうしたのは自分なわけだがそこを攻めてもらいたくない。

しかし、焦っても何も出て来はしないのは彼女自身も良く分かっている。だてに倒産の会社が倒産しかけたわけじゃないのだ。

「ここにきて出来る最善の手立てはあれしかない・・・」

つよくご飯をかみ締めながら作戦を決めていった。

「えっと、待ち合わせはここでいいんだっけ」

視界に三千院家執事が入ってきた。

ここは知っている人は知っているという穴場中の穴場といわれるデートスポットの公園である。人気があまりなく、なおかつそれなりの広さもあるという好条件の場所だ。

そんな庶民に愛される場所にはあまりにも適さない執事服を着ている少年は、同じく浮きまくっているメイド服の少女と共にとても見つけやすかった。

「おはようございます。え～っと、綾先さんでしたっけ？」

さっそく作戦1を開始する。といってもたいしたものではなく全くの見ず知らずのものですよとアピールすることなのだが。

千桜自身もこんなもので良いのかと自問自答していたが、もうかっこよさとか効果とか考えたら負けだという結論に達し、強引に進めている。

「あ、はい。初めまして、でいいんですよね？えっと、お名前を聞いても良いですか？」

！！！！！

千桜に衝撃が走った。”初めまして、でいいんですよね？”と聞くということは一度どこかで私を見ているということ。

（どこで見やがったんだー！！！！）

これは非常に重要な事だ。名前を知らないということはまだばれてはいないということだが、もしかしたら正体を知られる鍵となってしまうかもしれない。それはさすがに考えすぎかもしれないが、ここは神経質にならざるを得ない。

しかーし、千桜はもうひとつ重要なことに気がついた。

（名前なんて決めてねぇー！！！！）

これはどうしたことだろう。自分としたことが迂闊だった。本名を名乗るなんて論外だし、下手に答えると招待を悟られる可能性もある。しかし、そんなことを考えてももう遅い。遅いことばっかりだがもう今ハヤテに聞かれているのだ。即興で考える他はない。

少しだけ考えてから千桜は答えた。

「・・・・サウザンド・〇スター」

「・・・・どこの魔法使いの方ですか？」

しまった。つい口が滑ってしまった。千桜の千でサウザンドのつもりだったが、そもそも英語を使うところから間違っていた。間違っているぞ！私！

ハヤテは突っ込んでは来はしたが、主があの噂のナギだからだろうか、慣れているようで軽く流してくれた。助かった。

とりあえず、名前は最近気に入っている輝夜に訂正しておいた。

出だしからハプニングはあったが何とかなりそうな気がしてきた。

自己紹介、というか名前の交換もそこそこにして、二人は公園を歩き始めた。時間はまだ無駄にたっぷりあるので焦る必要はないのだが、何しろデートスポットの待ち合わせ場所なのでここにい続けるのは気が引けた。まぁ、正確に言えば千桜は気が引けたと言うべきだろうか。

公園内で歩を進めている間は、二人はお互いの主の話などで一定の話題を保っていた。

「輝夜さんはなんで相沢家ではたらいているんですか？」

「父さんの会社が倒産しそうになったからです」

「・・・大変でしたね（笑）」

こんな感じで笑い事じゃないのに笑われたりすることもあったりしたが、結構会話は弾んだ。

しかし、まぁ、良く考えてみると綾崎ハヤテとちゃんと話すのは初めてな気がした。しばしば会長と一緒に何かしているのを見ているだけだ。

彼の存在自体は編入してきた当初から噂でガン〇ム並みの強度だとか言われていたので知っていたのだが、今まで彼に抱いた疑問はまだ解決していないものが多い。この際だからちょっと聞いてみるのも良いだろう。正体がばれない程度に。

「学校では好きな人とかいるんですか？」

もちろん、この質問をする前にどこの学校に行っているのか、どんな感じの学校かとか、いろいろ必要な前菜はしっかりと消化した。

この質問の意味は、正直に言うとあまりない。だが、なんだか気になっていたことだ。別に彼のことが気になって、誰かと恋路まっしぐらなのかとか、そういうことではなく、普段会長であるヒナギクと仲良くしていてなんとなくそう思っただけなのだ。それに、学校の噂では彼は割りと女の子から好評なので一応聞いてみたくなったというのもある。

「えっ、、いやっ、その・・・・」

彼はやたらと恥ずかしげだ。誰かいるのかという期待をせざるを得ない。もじもじとしているのは許せないほどではないが気になったが、それは見逃すにしても、もしも誰かいるのならば絶対に聞き出

さねばならない。そうしろと女の勘が言っている。

しかし、彼からの答えは予想外のものだった。原作読者様はご存知だと思うので長々とは書かないが、甲斐性とかそんなのだ。

甲斐性・・・今の時代、普通に働いていて、贅沢さえしなければ食べていくことは用意だろう。その気になればフリーターでさえその場しのぎ感はあるにしろ生活できているのである。彼はよっぽど待遇の悪い職を志望しているのだろうか。それともよっぽど贅沢思考なのだろうか。他にも女は金くいだという意識があるという可能性もある。しかし、どれにしろあまり一般的ではない考え方だ。なぜそんな風に考えるのだろうか。

残念ながら、その話は彼が暗い表情を一瞬、自分でも確かに確認できたわけではないけれども彼の笑顔の奥に何かを感じたから、それ以上深入りするのはやめた。

そうしたら、今度はこっちが質問を受ける側になった。

「そういう輝夜さんも誰かお付き合いした人とかいなかったんですか？」

それはいつか来ると思っていた。今に限らず、学校で友達と話すときもいつも同じ答えを返すことにしている。というか、それしか返さざるを得なかった。

「私、誰かを好きになったりしたことがないのでわかりません」

なぜかめがねをキラーンと光らせながら言ってしまう。きっとこれは癖だろう。

もう、このせりふを何回言ったかわからないが（でも指で数え切れる程度だが）、別に嘘をついているわけでもない。中学時代もクールな感じを徹底していたので男もよってくることなく、ごく普通に過ごしていたらいつの間にか高校生になっていたという感じ。高校になってからも、特に誰かを意識したりすることは全くない。

だからといって、愛情を感じられないわけじゃない。家族にはちゃんとそれなりの愛情を持って接しているつもりだし、他人同士の恋愛だって理解できているつもりだ。

ただ、男が枠の外にいるだけなのだ。

その話が終わった頃、公園を一回り回りきった。途中、噴水やボートに乗れる池などもあったが、話に夢中で完全にその存在に気づくことなく通り過ぎていた。惜しいことをしたものだ。これから特にすることもないのに。

というか、そもそもなんでこんな交流会なんて開いたのだろう。良く考えれば理由を聞いていなかった。それは綾崎ハヤテも同じようで、聞いても答えは返ってこなかった。まぁ、お嬢様方の発想はす

ばらしい家庭環境のおかげですばらしいことになっているので常任の発想からはずれたところで今回も何か進んだのだろう。

遠くのほうでカラスの鳴き声が聞こえた。実はまだお昼にもなっていないのにやけに待ち遠しい夕方を連想させられて千桜は若干イラついた。カラスの声を気にするほどに今は暇なのだ。公園を回ってしまったので休憩ということでベンチに座っているのだが、実際はどこに行く当てもないので致し方なくそこにいるだけなのだ。かんかん照りの太陽も、それを吸収して倍返しにしてくる舗装された通路も、何もかもが敵に感じられる。どうして私はこんな不幸な目にあっているんだか。

すると、突然、綾崎ハヤテが立ち上がって手を握ってきた！

も、ももももしかして・・・告白とか・・・！？

いやいやいやい、まだ断る準備が・・・！

「ちょっと、ショッピングにでも行きませんか？」

修羅場は続く・・・

急展開になったときのその人の対応でその人の読んでる漫画が分かる（後書き）

まだ続いてる・・・

昨夜さんのいけづ（前書き）

久しぶりの更新となりました。
皆さんお元気でしたでしょうか。隣のマニアです。

しばらく更新できなかったこと、本当に申し訳ないです。心配頂いたこと感謝いたします。

さて、長い休憩が入ったのでまた新鮮な気分で書き始めてます。また新しいアイディアが浮かんできたり、再び書く楽しさを実感しました。皆さんに喜んでいただける小説を書けるよう頑張っていきます。
それではとある憂鬱な一日のこと始まります。

昨夜さんのいけづ

「ショッピング・・・いいですね、グ～（はるみさん風）ですよ」

・・・。

しばらくの間、二人の間を沈黙が訪れた。

（しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！思わずいつもの癖が出てしまった！これはどうしたらいいんだ・・・・。今の発言を撤回してくれといったらしてくれるだろうか。いや、心の奥底じゃ今の台詞が消えることはきっと無いと考えたほうがいい。んじゃーどーすればいいんだーーーー！教えてくれゴッド！）

（なんなんだこの振りはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！この妙に旬が過ぎた感じを違和感なく使いこなしてきているあたり確信犯的な使用法なのか！？ここは突っ込みを入れるところなのか？いや、下手にしてもなんだかよくない空気になりかねない・・・・んじゃーどーすればいいんだーーーー！教えてくれゴッド！）

そんなに頼られても困るんじゃがのー　　↑ゴッドのつぶやき

そんな感じで二人のが心の中で戦っている間も、時間は刻々と過ぎて言った。無言の時間が。どちらが先にその硬く閉じた口を開くの

か、どちらがこの状況を打破できる勇気を持っているのか、そこらへんが大いに試されている。

「・・えっと、それじゃあ行きましょうか・・・？」

ハヤテだった。スルーの方向だったが。だがこれは賢明な判断だっただろう。千桜的な視点から見てもこれが最も対応しやすいだろう。

そんな感じのなんだかぎこちない雰囲気のまま二人は公園をあとにした。

・・・・・・・・・・

一方三千院家では・・・

「そういえば、今日は借金執事はいなんか？」

豪華なソファーでいかにもお金もってます的な座り方で新聞を読んでいるナギに昨夜はふと問いかけた。
眠くなりそうなほど陽気な天気でうとうとしていたのか、やや間を置いてからナギが答えた。

「・・・お前がこの間部下たちの親交を深めたらいちゃうとか言い出したからハヤテを行かせたのを忘れたとは言わせんぞ？」

ナギとしてはハヤテとは一秒でも長い間一緒にいたい。恋人として当たり前の感情だ。しかしマリアを行かせると日常生活に支障が出る可能性がある。いや出るだろう。無理やりそんな合コンみたいなのに行かせた暁には、どんな陰湿な攻撃を加えられるのかわかったものではない。
クラウス？覚えていたら行かせたかも知れない。覚えていたら。

・　・

「ああ、そういえばそんなことも言ったなー」

二、三日前に昨夜がナギの家に遊びに来たとき、部下同士のふれあいって意外と少ないと言う話になり、じゃあ親睦会でも開くかという感じの会話をしたのだった。昨夜としては軽く言ってみただけだったんだが、どうやらそれをきいていた部下やナギが割りと本気だったらしい。そういえば千桜にそんなことを話した記憶がないわけではないなーと昨夜は思い出した。

チュンチュンチュン

小鳥の鳴き声が部屋の中に響き渡るほどの静寂がまた室内を包んだ。暖かくて心地よい平和な一日だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7236e/

とある憂鬱な一日のこと

2010年10月11日00時06分発行